

明治初期プロテスタントの神戸伝道とD・C・グリーン

茂 義 樹

はじめに

一八六九年（明治二）、アメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Mission）が日本伝道を開始し、最初に派遣した宣教師はD・C・グリーン（Daniel Crosby Greene, 1843—1913）である。グリーンはその年の七月アンドーバー神学校を卒業、下旬にマサチューセッツ州ウエストボロ教会で按手札を受け、翌日同教会でメリー・ジェーン・フォービス（Mary Jane Forbis）と結婚式を挙げた二六歳の青年であった。同年一〇月五日から八日まで、ペンシルバニア州ピッツバーグの第三長老教会で開催されたアメリカン・ボード第六〇年会に出席したグリーン夫妻は、そこで日本への最初の宣教師並びに宣教師補として任命を受け、その足でサンフランシスコを経て横浜に向かった。彼らは一月三〇日横浜に到着、ただちに長老派、改革派ボードの宣教師達と会い、最初の定住地を江戸と定め、一二月に築地ホテルに入る。さらに家を購入し、江戸での生活を始めた矢先の一八七〇年（明治三）二月、アメリカン・ボードの中国派遣宣教師で日本伝道開始の提言者のひとりヘンリー・ブロッジェット（Henry Blodgett）によって、兵庫、神戸の案内を受け、神戸を伝道地にしようと決意する。グリーン夫妻は同年三月神戸に居を移し、これか

ら一八七四年（明治七）まで、四年に及ぶ神戸伝道が始まる。本稿は神戸公会（神戸教会）設立までに至るグリーンの伝道活動を、彼の本部宛書簡、本部のグリーン宛書簡、宣教師会議記録、宣教師の回顧録等を中心にして、明らかにしようとするものである。

I 切支丹禁制令のもとで

一 神戸定住

グリーンは一八七〇年三月三十一日、船で神戸に到着し、先の視察の際に確保していた家に入った。この家は、後に彼が家を新築した中宮村八番の谷をへだてた反対側の地点であった。この最初の住居は後年ハウ（Annie L. Howe）の敷地となる所であり、これがハウの個人宅を意味しているのであれば、中山手通六丁目二二番地にあたる⁽¹⁾神戸では慶応四年の兵庫雑居地協定で、海岸から山際と、生田川から宇治川までの間に外国人の居住が許されていた。ほとんどの外国人が居留地に住む中で、グリーンは日本人の居住地の中に、四室と召使い部屋の付いた小さい家屋を一カ月三三ドルで借り、生活を始めたのである。⁽²⁾

一年余り経た一八七一年（明治四）一月、グリーンはボードの承認のもとに、約三〇〇ドルを投じて土地を得た。⁽³⁾中宮村八番にあたる土地で、後年、山本通六丁目五三番地となる。尚、グリーンの回顧によると、この土地はオランダ副領事の斡旋で、最初ジョセフ彦より借り、後に買取ったものという。⁽⁴⁾グリーンはこの地に約八五〇ドルの経費をかけ、中二階付の家を建てた。後にこの家はアトキンソン（J. L. Atkinson）、スタンフォード（A. W. Stanford）の住宅ともなるが、アトキンソンによって二階建に改築される。⁽⁵⁾

グリーンに伴って江戸から来た日本人が三名いる。築地ホテルで知り合いグリーンの日本人教師となった市川栄之助、まつ夫妻と大坪昌之介である。市川夫妻はグリーンの家には住まず、最初は宇治野村百姓善右衛門方に、明治四年には同村百姓仁左衛門方に住み、そこからグリーン宅に通っていた。⁽⁶⁾大坪昌之介は小川義綏の弟であり、長老派宣教師の紹介で横浜で召使いとして雇われ、江戸、神戸とグリーンに付いてきたものである。⁽⁷⁾

グリーンは神戸到着後間もなく、英語習得を目的として彼の自宅に通う三人の日本人がいた。グリーンは回顧によれば、前田泰一、影山耕造(松山高吉の異母兄)、沢山馬之進である。⁽⁸⁾前田は三田藩士で、同藩の近代化政策のブレーンである福沢諭吉が陽チブスにかかった際に「聖書でも読もうか」と言ったのを小幡篤次郎から聞いて、自らも聖書を学ぶことを決意したという。最初の出合い以来、前田は常にグリーンから学び、後に自らも伝道を志し、神戸公会成立直後は長老(後に会長)として活躍する人物である。影山耕造がグリーンと接触するに至った動機は不明であるが、後にベイリー(J. C. Bailey)来神の際に彼の日本語教師となった人物で、松山高吉にも多大な影響を与えた。沢山馬之進は長州吉敷藩士であったが、兵庫県外務課の内海忠勝を頼って来神、内海の紹介でグリーンのもとへ英語を学びに通ったものである。グリーンは英語聖書をテキストに用い、彼らに英語を教えながら、キリスト教の話も加え、やがては彼らを家庭礼拝に招くようになったと考えられる。

二 神戸ユニオン・チャーチ

グリーンは神戸移住の動機の一つには、そこに在住する外国人のモラルが極端に悪く、さながらソドムの様であるのにプロテスタントの牧師が一人もいないことにあった。せめて抗議の声をあげるためにも自分はその地に赴く、と

述べている。⁽¹⁰⁾

彼は一八七〇年五月二日、三五名の会衆を集めて最初の外国人礼拝を守った。場所は居留地一八番に建築されたフリーメイソンの建物であった。⁽¹¹⁾しかしこの建物は薄暗かったので四回で打ち切り、以後居留地七九番のホテル・ワンダフレンの二階で、礼拝中は鍵をかけて礼拝を守った。⁽¹²⁾会衆の中心は商人達で出入りが多く、特に船の出入港が日曜日にあたると、手紙の発送、受取り等のため会衆の出席が減るという有様であった。しかし中には熱心な会衆もいて、最初の一カ月でオルガン購入献金の予約が二六〇ドル集まった。⁽¹³⁾

仮住いをやめて自分達の会堂を建設するための第一回会合が一月五日に行われた。アメリカ人二名、ドイツ人二名、英国人三名、オランダ人一名、計八名が出席した。第二回会合は一八七一年一月一四日にもたれたが出席者は四名、三回目はグリーンだけという有様であった。しかし同年四月一九日の会合で、英国人商人ブラッドフィールドが代理人を通じて、所有地である居留地四八番の半分を、会堂建設を条件に寄付すると申し出たため、三、五〇〇ドルで会堂建築を行う旨決定した。建設委員はグリーンの他英国領事サガワー、オランダ領事マルタス、ドイツ人フィッシャー、アメリカ人フォップスであった。⁽¹⁴⁾

グリーンは一八七一年一月一八日付第一五信で、既に一、五〇〇ドルを集めたことを報告するとともに、予約金のキャンセルをしたオランダ領事に強く抗議した事を記している。⁽¹⁵⁾また同年三月一七日付第一六信では、もしアメリカン・ボードが二、〇〇〇ドルを出してくれるならば、外国人礼拝と日本人礼拝共用の会堂を建設できると提案する。⁽¹⁶⁾この件に関してボードは冷やかに拒否の返事を出している。この時期ボード本部では、幹事クラーク (N. G. Clark) がトルコ視察のため旅行中で、他の幹事がグリーンとこの件で手紙のやり取りを行っているが、その調子は事務的、

高圧的で、日本人会衆がなくなる恐れがあるとして、会堂の共有は賢明な意見ではないと拒否する。⁽¹⁷⁾ 結局ボードからの資金援助をあきらめ、グリーンは自らが一、〇〇〇ドルを外国人会堂建築のため献金することを決意する。⁽¹⁸⁾ 先に江戸での住居購入と売却に伴う借金をかかえていたグリーンは、更に一、〇〇〇ドルの借財を負うことになる。以降ボードに対しグリーンは、しばしば給与の引き上げを要求するが、その理由はこの辺りにあると考えられる。

こうした経過を経て外国人礼拝堂の建設が進められ、一八七二年(明治五)十一月二三日、レンガ造りの教会堂が完成する。現在我々は写真でその姿をしのぶことしか出来ないが、グリーンが設計したと伝えられる同志社チャペルと似ているこの建物も、その原案はグリーンの手によるものであろうと推察される。同日の献堂式とともに教会が設立され、Union Church of Christ と名付けられ、初代牧師にグリーンが就任する。⁽¹⁹⁾

この教会は、ボード本部の批判的見解にもかかわらず、赴任して来る宣教師の拠点教会となっていた。アメリカン・ボードの宣教師の大半はこの教会に籍を置き、ここから全国各地の伝道に出かけていった。同教会史は自らをMission Home Churchと呼んでいるのはこうした事情を指す。

三 市川栄之助逮捕

一八七一年三月三日、O・H・ギューリック(O. H. Gulick)が神戸に到着し、日本ミッションはグリーンと合せて二名になった。彼の到着によって、グリーンはかつて外国人が住んでおり、洋風に改築されていた家を借りて彼を住まわせた。⁽²⁰⁾ またグリーンの日本語教師市川栄之助をギューリックの教師とした。グリーンはその時、市川にヘボンの訳した日本語聖書の写本を作る様命じていた。

この市川栄之助夫妻が同年六月三〇日（陰曆明治四年五月一三日）夜半、近くの家に遊びに行った帰り借家である宇治野村百姓善左衛門宅前で逮捕され、家宅搜索を受け、写本も押収された。グリーン、ギューリックはその翌朝よりアメリカ領事、兵庫県知事に対して栄之助釈放を働きかける。

ギューリックは同年七月一日付書簡で、彼の日本語教師栄之助逮捕を本部に急報し、押収されたものは、章節書き込み中の写本一冊を含むマルコ福音書二冊、筆写中のマタイ福音書とヨハネ福音書、祈祷文の写本の五冊であると報告する。また、栄之助に代わる教師と写本家を得るのは困難である事、この事件によって、グリーン宅でいつも六七名集めて開かれている祈祷会と日曜午後の Exercise（家庭礼拝のことと思われる）はつぶれるだろうと述べている。

七月八日付書簡で彼は、在神アメリカ副領事フランク（Paul Frank）が兵庫県知事中山信彬にこの件について抗議をした様子を伝えている。フランクは、アメリカ人の召使いの逮捕は事前の通知が必要であると抗議したが、中山知事は、栄之助は住込みではないのでその必要がないと主張、フランクはそれに対し、栄之助が常時グリーン、ギューリックの仕事をしており、住込みと同じであると反論したが中山はこれにも応じなかった。結局フランクはこの件をアメリカ大使デロング（C. E. Delong）に委ねることにした。

ギューリックの七月十五日付書簡によると、その数日前にグリーンが副知事に呼ばれ、栄之助の予審が既に終り数日後に最終審理が行われる事、もし無罪ならばただちに釈放される旨告げられた。しかし、七月一四日、グリーン、ギューリックが副知事に呼ばれた時には、栄之助逮捕は弾正台によって行われたもので、栄之助は大阪に連れ去られたと言われ、宣教師達はひどく落胆する。更に七月三十一日付書簡では、その日、グリーン、ギューリックが副知事に呼ばれ、栄之助が行方不明であると告げられる。これ以降栄之助の消息は分からず、一二月一六日付書簡では、栄之

助が大阪から京都に移され、更に江戸に移されたとか、死んだとの噂があると伝える。⁽²⁶⁾ 諜者報告によれば、グリーンはこうした噂をたよりに、江戸の押川方義に依頼して市川の名を尋ねてもらったりするが真相はつかめなかった。⁽²⁷⁾ 栄之助が行方不明のまま一年が経過した後、突然栄之助夫人まつ、からグリーン宛の手紙が届く。手紙は金の催促であつたが、住所が記入されておらず、伏見の消印だけが手掛りであつた。ただちに新知事であつた神田孝平に問い合わせの手紙を出したところ、一八七二年一月二五日栄之助は獄中で死亡したとの返事が届けられた。⁽²⁸⁾ グリーンはすぐ知事に対し、まつの釈放運動を行う。まつはその後釈放され、グリーンが彼女を引き取る。栄之助が獄に入れられたままになつていた理由については、一八七一年八月弾正台と刑部省が廃止され、司法省が新設されたとき、引継ぎもれとなつて忘れ去られていた結果だとグリーンは告げている。⁽²⁹⁾ 恐らくこれは知事の調査結果に基づく報告と考えられる。

さて、市川栄之助をプロテスタントの殉教者だとする説があるが、果してそうであろうか。彼は信仰を持っていたのであろうか。グリーンは逮捕前の市川について次の様に述べている。

「先生の方は先日キリストに祈る時どの様に言えばよいのかと尋ねてきましたので、口にすべきだと思われる主要な事柄を出来るだけ上手に説明してやりました。彼はキリスト者になるとの決意を表明しました。もし他の人達に説教さえしなければ政府も彼に手出しをする様なことはないと思うと言っています。しかし私は彼に他の人にも説くべきだと話し、漢文聖書のマタイ伝の最後の章にあるキリストの命令を示して、私が日本に来たのはその為であると話してやりました。この事は彼を驚かすと同時に、満足させましたようです。が、キリスト者である為に受けねばならない数多くの危険に対して、彼が心の準備を十分しているかどうかは疑わしく思っています」

す。しかし、彼は自分の聖書を毎日読んでいますので間もなくキリスト者になるだろうと確信しています。⁽³⁰⁾」

この手紙はグリーンが神戸に到着した三カ月後のもので、栄之助のキリスト教との接触期間もまだ短い時点での手紙である。その後の彼の信仰がどの様に強まっていたかを伺い知るすべはないが、ホテル・ワンダフレンでの外国人礼拝に出席しつつけた唯一の日本人は彼である。しかしグリーンは危惧していた通り、栄之助は仮に信仰を持っていたとしても、危機を乗り越えることは出来なかった。糺弾口書にある彼の態度は殉教者とは程遠い。一考を要する点⁽³¹⁾は、まづの報告である。「未亡人の説明によれば、栄之助は取調べにおいて、彼自身をキリスト者として認めた」とグリーンは記している。しかし当時の宣教師達はこの問題を冷静に受けとめ、殉教者として栄之助を語る事はしていない。殉教者市川のイメージは一八七二年岩倉使節とフィッシャー國務長官の日本の信教の自由をめぐる交渉中に、駐日大使デロングの口から栄之助の件が持出され、岩倉が返答できず、それが信教の自由を認めるきっかけとなったという、グリーン⁽³²⁾の報告である。そのことは神戸教会一〇年紀以後、宣教師達によって除々に語られていった様である⁽³³⁾。

II 伝道への布石

一 宇治野村英語学校

宇治野村はグリーン⁽³⁴⁾の住居のあった中宮村より一つ海岸寄りの村である。切支丹禁制令下にあつてキリスト教伝道への可能性を探るために、グリーン、デビス(Jerome D. Davis、神戸到着一八七一年二月一日)は、宇治野村に一軒の家を借りて、一八七二年二月学校を開いた。⁽³⁵⁾デビスは後年、その学校のあつた場所は大正期の神戸教会(下山手通六丁目)

の近くにあたると述懐している⁽³⁴⁾。この学校は最初デビス、グリーン⁽³⁵⁾の私塾という形で、ボードの許可や経済的援助を受けずに始められた。グリーンは開校前にこの学校の計画について次の様に手紙に書いている。「数人の日本の友人達は一日数時間の学校を開いて欲しいと願っており、私たちも非常に有益なことだと考えて、目下適当な建物を探しています。これはボードに支弁してもらわずにすむと思います。建物の家賃と同額を学生から徴収しようと考えています」⁽³⁶⁾。ここには日本人の要請によって英語習得を目的として学校を開くこと、ボードの援助はあおがない事の二点が明らかにされている。

開校を伝える手紙は、一月一六日付で書かれ、二週間前に開校されたと次の様に伝えている。「前に学校開設の意向について書きましたが、知人関係者以外にも広く人数を集めようとの目的のもとに貸りた建物で、二週間前から業務を行っています。これはデビス氏と私自身の私的なものであって「ボードには」何ら責任のないものです。デビス氏が必要経費を前払い致しましたが、予想では用いた費用のかなりは戻ってくるでしょう。これは寄宿舎学校ですが、教える事、一般的監督は別として、他のすべての面倒は、幹事によって構成される自治組織に委されており、かれらは非常によくやっている様に思います。寄宿生と通学生の数は約四〇名です。私たちは毎日午後に一時間半をさしています。私の主要な仕事は、一時間におよぶ旧約の勉強です。……八名ないし一〇名が読み、他の多くは座って聞いております」⁽³⁶⁾。

グリーンは日曜日にも聖書研究会を学校で開いている。学校設立に際し宣教師達の真意はここにあった。「日曜日に私は学校の建物を用いて約一〇名からなるバイブル・クラスを開いています。昨日私たちはマタイ伝一九章の後半

を読みました、約一時間半の話し合いの話題を提供してくれました。彼ら以上に注意深い鑑賞力のある聴衆を求める事は不可能でしょう。」⁽³⁷⁾

この学校に関する日本側の資料も僅かながらある。松山高吉（当時は関貫三）は「旅日記」に次の様にいう。

「（明治五年）一月三日米国デビス氏ヲ聘シテ英学教授所ヲ神戸宇治野町ニ開ク結社人員八名岡田実^{加州大聖寺}阿部

昇三長崎堀希^{一作州}落合順川二郎^{作州}倉合藤平大聖寺前田泰三^{摂津}三田耕造兄及比高吉^{当时仮ニ関}結社金各三円ヅ、ヲ出ス」⁽³⁸⁾。これに

よると陽曆一月三日、結社人八名で英学教授所を開き、教授としてデビスを迎えた。そのために彼らは三円ずつを出し合ったという。

譯者伊沢道一は明治五年二月一三日到來の譯者報告において、この学校について次の様に述べる。

「一、同教師デビス一月朔日ヨリ学校ヲ開由ナリグリーン専周施ス関貫造越後人也西京関忠蔵ノ従弟ナリ影山耕造

早川正人^{江州人}ニ^{グリ}隨從ス学校ノ事ヲ周旋ス」⁽³⁹⁾

譯者報告では開校日は陽曆二月一日で、デビスが主催し、松山高吉、影山耕造、早川正人が幹事であったという。さらに影山の言葉として学校設立の意図を次の様に報告している。旧藩士で知識を求める者が多いので学校を開く。費用は飯料共月二兩二步とし、貧しい者で望む者には教師が衣食を与えて学ばせる。将来役人や商人になってもその恩義は忘れないだろう、と。⁽⁴⁰⁾

明治六年一月一〇日付伊沢道一の譯者報告では学校幹事がキリスト教への信仰に燃え上がっている様子を影山耕造の言葉で報じている。

「第一月七日影山耕三曰ク近頃学校ヲ組立ルニ付テ社ヲ結マシタ凡十人斗出来マシタコノ人々初ハ只開化ノ御手伝ト……心得マシタガ近日八名バイブル信向⁴⁷イタシ中々私ナドノ及コトデハナヒ教法ノ徳化実ニ感心イタシマス」⁴⁸。初めは英語習得を通して文明開化を志していたのが、聖書を学ぶことに熱心になり、キリスト教の感化を多大に受けている様子をうかがえる。

グリーンも一八七三年（明治六年）二月一七日付書簡で再び学校のバイブルクラスについて述べた後、「少くとも三名の者が真剣に考えており、近い将来受洗してくれるかも知れないとの希望を持っております」⁴⁹と書いている。始めての求道者の出現である。

所でこの学校の成功によってか、先のグリーン、デビスの私塾であったこの学校はミッション・スクールに衣替える。一八七三年二月三日、グリーン宅で開かれた宣教師会議の記録を見ると、「ミッションは、デビス、グリーンによって宇治野村で始められたものをミッション・スクールとして引受け、建物の家賃は現時点から支出する」との決議を行っている。理由は不明であるが、次の三つのうちの一つだと考えられる。一、デビスや日本人結社の経済的負担に問題があったのでミッションの援助を仰いだ。二、学校が成功したので、更に拡大しようとしてミッションがテコ入れをした。三、課者報告によると、生徒が集まりすぎたので新しい家に移転の予定であるので、⁵⁰移転を機会にミッション・スクールとした。三番目が理由としては一番可能性があるが確定は出来ない。

所が、学校がミッション・スクールになった直後の二月一九日、⁵¹明治政府は切支丹禁制の高札撤去を命じ（太政官布告は二四日）キリスト教伝道は解禁された。これによって宣教師は直接伝道に力をそそぎ、学校への関心は急速に遠のく。宣教師のもとへ人を集めるのにもはや間接的な手段を取る必要がなくなった事、学校教育を担おうとする宣教

師がいなかった事にも一因があろう。一八七三年一〇月三日、グリーンは学校廃止の意向について次の様に述べる。

「英語の勉強に力を注ぎすぎているので、現在の形のままこの学校を続けるのは最良だとは思えませんし、われわれがわざわざ初等教育に気を配らなくてもすむような状態にそのうち官公立学校がなってくれるでしょう。そうしなければもっと完全な形で説教に専念出来るようになります。」⁴⁶

初期の宣教師達は、どちらかといえば初等教育には消極的であった様だ。考えた事は牧師養成の神学校である。グリーンは別の手紙で次の様に言う。「昼間の学校を廃止せざるを得ませんでした。しかしデビス氏は集められるだけの人を集めて毎日二時間聖書研究を行うつもりをしております……それが神学校の核になる様にと願っています。」⁴⁶

一八七三年三月一日、初の女性宣教師としてタルカット (Eliza Talcott)、ダッドレー (Julia E. Dudley) が来神、タルカットはこの学校を手伝っていたが、この学校を教育機関としてより整備した形で同年一〇月三日ダッドレーと共に新しい塾を花隈村前田兵蔵宅に開設する。教育を専門とした二人の女性宣教師によって英語学校の理念は引継がれたと言えるだろう。

宣教師達にとって最初に試みられた日本人向けの事業であったこの学校は、その役割を果し、多くの求道者を生んで閉鎖されたのである。

二 書 店

学校において英語を媒介にキリスト教伝道を試みた宣教師達は、次に一般大衆に文書を媒介としたキリスト教伝道を企てる。秘かに出まわっている漢訳聖書を求める人や、英語聖書を宣教師に求める人が多いこと、更にヘボンによ

ってマルコ伝の日本語訳が完成したので、その普及を試みるねらいであった。文書伝道の始まりである。

一八七二年二月一六日付書簡で、グリーンは街なかのある書店に聖書を置く契約を交わした事をつけている。この書店はヘボンの日本語訳マルコ伝は扱わなかったが、英語と中国語聖書は既に取扱っていた様である。⁽⁴⁷⁾

この街の書店との契約がうまく運んだかどうかは不明であるが、計画は更に発展して自分たちで書店を経営する計画が持ちあがる。切支丹禁制令解除寸前の頃である。

「街で聖書、トラクト類の店を開くことを提案します。完全にとはいきませんが、ほぼ自力 (self sustain) で行えるだろうと思います。日本語、中国語の書籍をかなりの範囲に配布できる唯一の手段ではないかと考えます。聖書もまもなく売れると思います。聖書トラクト協会に手紙を書いて、こうした店か委託所を援助してくれる様頼んでみます。この店の世話を喜んでしてくれる人物を探しています。もっとも店を貸り、人を雇えるならの話ですが。六カ月間その実験をしてみるとの意見にミッション全体が皆賛成してくれました。」⁽⁴⁸⁾

先の書店との契約が聖書だけであったのに対し、この書店はトラクト類をも含めている事、中国語書籍をも取扱おうとしているのが特徴である。『天道溯源』が多くの人に親しまれ、キリスト教理解を助けているのもその一つの特徴であろうし、アメリカン・ボードや他のミッションが既に出している中国語のトラクトがすぐ使える事もねらいの一つであろう。又在米の聖書協会やトラクト協会からの援助も期待出来る事も考慮されたであろう。一つの実験としてミッションの援助のもとに自立をめざす書店の運営が練られた。

この手紙に先立つ一八七三年二月三日の宣教師会議では、この書店に関して次の様な決議が行われる。一、聖書と宗教関係書を扱う書店を開く。二、その家賃は月一〇ドルを超えない事。三、その書店に日本人を雇い売上げの一〇

％を彼に与える。四、聖書の価格は次の通りとする。中国語聖書五〇セント、同新約聖書一八・七五セント、日本語訳マルコ伝一二・五セント⁶⁹。

同年三月五日付書簡によれば、神戸の繁華街に家賃二五ドルで一軒の家を借りるのに成功する。それは可成り大きな家なので半分を書店とし、残り半分をチャペルに用いることが出来るとし、家賃の半分はミッションが持ち残り半分をトラクト協会かどこかに負担してもらう。もしミッションがチャペルを認めないならば他人に貸すつもりである。もしミッションがチャペルとして利用するつもりならば、修理改装に五〇ドルから七〇ドルかければ、一五〇席以上のチャペルが出来るだろうと、グリーンは述べる⁶⁹。

最終的にはミッション・チャペル案が認められたが、トラクト協会の家賃半額負担は実現しなかったらしい。

この書店となった家こそ後に神戸公会誕生の地となる記念すべき建物である。『植村正久と其の時代』一卷にこの建物の写真と解説がある。写真の所有者本間重慶に宛てたグリーンの言葉が写真の裏にあるのを解説者吉野作造が紹介している。

「この建物を初めて借りたのは明治六年の二月だと思ふ。……（略）……最初は単に本屋として使ったので家賃の半分も前田泰一君が出していた……」。

この回顧録で注目すべきことは、書店分の家賃を負担していたのは前田泰一であったことである。また書店運営にあつていたのも彼だということになる。伊沢道一の明治六年四月一五日の諜者報告の中には「前田泰一（丹波生歟）異書ヲアキナフ也⁶⁹」とある。

切支丹禁制令解除後の一八七三年五月二三日、グリーンは太政官にあて申請書を提出する。内容は、一、キリスト

教関係書類を販売すること。二、自発的意志に基づく日本人が宗教書の配布、販売に従事する。この二点の許可を求めたものである。⁽⁵³⁾ この文書の英文の写しがボード本部へ送られているので、申請の事実を知るが、日本語による申請がいかなる表現を取り、また、太政官がどの様に答えたのか興味をひかれるが、日本側の記録の所在がつかめない。書店がうまく軌道に乗り開店したことは、グリーンンの回顧録やデビスの伝道用トラクト『真の道を知る近路』の中の案内でも確認できる。

書店経営にあたり、宣教師達は単にトラクトを取り寄せ販売にあたるだけでなく、自ら伝道文書の製作を試み、そのための資金をアメリカ・トラクト協会に仰ぐ。ミッションは同年七月アメリカ・トラクト協会に対し三〇〇ドルの援助を申し出ている。これは上海の長老派ミッション発行のトラクト（『天道溯源』を指すと思われる）購入費と、一八七二年横浜で開催された第一回プロテスタント宣教師会議で決議されたことであるが、同総会が指名した聖書翻訳委員会の認可する刊行物の印刷費とにあてられる。⁽⁵⁴⁾ 同様の要請がアメリカ聖書協会にもなされた模様で、同年十一月の宣教師臨時総会では次の様な要請がなされている。アメリカ聖書協会に四八〇ドルの援助を求め、うち二三〇ドルは上海の同協会からの中国語訳聖書の購入にあて、二五〇ドルは、横浜の同協会から日本語文献（ヘボン訳マルコ伝を指すと思われる）購入にあてる事。⁽⁵⁵⁾

一八七四年五月の宣教師総会では個人印刷で五、〇〇〇部出していたトラクトを Tract Publishing Fund を用いて一〇、〇〇〇部印刷する旨決議している。このトラクトはデビスの『真の道を知るの近路』（以下『近路』という）である。また、讚美歌の書き下ろし、編集のため委員にグリーン、ゴルドン (M. L. Gordon)、ベイリー (J. C. Berry) の三名を指名している。⁽⁵⁶⁾ グリーンンの回顧録によれば、一八七三年から七四年にかけ神戸で出版された印刷物は、英和対訳

の『山上の垂訓』、デビスの『近路』と讃美歌であった。⁽⁸⁷⁾英和対訳『山上の垂訓』は恐らく英語の授業用で、他の二点は伝道集会の度に聴衆に与えられたものであったと考えられる。湊川神社神官がキリスト教偵察の目的で礼拝や伝道集会にまぎれ込んだ時（後述）ももらって来ている。デビスの『近路』はそれから一〇年間に一〇万部印刷され、伝道用に配布されたという。⁽⁸⁸⁾この様にこの最初の書店はキリスト教図書の出版センターとしての性格も兼ねていた。書店の所在地であるが、『近路』最終ページに「日曜日講釈場所」として「摂津神戸市場丁本屋にて」とある。明治七年神戸の市街地地名の改正以後には「市場丁」は「元町五丁目本屋」とだけ記されている。残念ながらこれは地番の表示を欠いているので元町五丁目のどこなのかは確認出来ない。神戸教会にはこの建物の写真が残されているのみである。

なお書店の残り半分をチャペルとして使用する際、必要な修理改装費として五〇ドルから七〇ドルを本部に申請したことは前述したが、礼拝を持つ様になってもただちに改装が認められた様子はない。後述の湊川神社神官の報告の中に「室中臭気甚シク……」とあり、換気が悪かった様である。しかし同年十一月の宣教師臨時総会では八〇ドルで改装が認められている。⁽⁸⁹⁾

三 日曜礼拝と安息日学校

直接キリスト教伝道が可能になった一八七三年、先の書店の隣室をミッション・チャペルとして用い、日曜礼拝と安息日学校が開かれることになった。いよいよ本格的に福音宣教の業が始まったのである。

同年一〇月三日付グリーン書簡には、ミッション・チャペルの礼拝の模様が語られる。今その日付を算定し、報告

されている参加人数をあてはめると次の様になる。

九月十四日、二六名。二十一日、二八名。二十八日、五〇名。

グリーンは礼拝について次の様に述べている。

「……私たちの活動が許されている場所は町一番の繁華街を含んでおり、ミッション・チャペルはなかでも最も賑わった地域にあります。従ってこの日曜日には五〇名の会衆が礼拝の始めから終わりまで参加し、空席がないため多くの者が帰りました。半数は店主や機械工で、単なる好奇心で集まっているとはいえないものの、当局に対する恐れや、大阪に住む少数の者達が持つような制約がないことを示しています。」⁽⁸⁹⁾

神戸の中心部で、礼拝が一般に開放され、五〇名の参加者も当局に気兼ねすることなく堂々と参加している様子が報告されている。大阪その他の所と違い、知事の神田孝平がキリスト教に好意を持っていることもあり、キリスト教伝道が自由に行え、一般会衆も当局を恐れる必要がなかった。礼拝の聴衆は増えつづけ、一〇月中旬には八〇名以上となり、⁽⁹⁰⁾一月中旬には七五名から一〇〇名と報告される。⁽⁹¹⁾先述した様に一一月にはチャペルも改装され、少しは収容能力を増した様であるが、日曜毎に多くの人がつめかけて賑わった様子が伺える。

この礼拝の模様を伝える資料はない。ただ神戸公会設立後であるが一八七五年（昭和八）頃村上俊吉が礼拝に初めて参加した様子が彼の『回顧』に次の様に述べられている。

「午後の三時の時計が鳴ると、^{りやうりやう}囁々たる風琴がなりだした。此日は大阪のアダムス夫人（注。宣教医アダムス医師夫人。アダムス医師夫妻の来日は一八七四年二月）が来合せて居って、美はしい声で「きょう主が招く来れよ、夜路たどるさ迷い人」という歌を独吟した。其から祈禱があつて説教があつた。誰れの説教であつたか忘れたが、讚美

歌だけは覚えておる。僕は風琴の音も讃美歌も此時が始めてで恰も塵外仙境に入った心地がした。宗教は理屈にあらずして高く清き霊味に浴し、知らず知らずの間に罪惡の汚穢より脱俗するものとは、是等の消息を言つたものであろう。⁽⁸⁸⁾

ここにあるような独唱、祈祷、説教それと讃美歌指導がこの頃の伝道集会のパターンと思われる。湊川神社神官の有馬伝道の偵察の中に報告されているのもこうしたものである。村上俊吉が述懐している様に、聴衆の多くは、オルガン、独唱、讃美歌に魅せられたが、宣教師の未熟な言葉の説教にはついてゆけない者も多くいたのではないだろうか。

礼拝の盛況に力づけられた宣教師達は、同年十二月七日より安息日学校を始めた。礼拝に余り多くの人が集まるので、入門的、教育的プログラムを朝に持つようにした。デビスの回顧録によると、校長はベイリー医師、集まる者は五歳から五〇歳までであったという。⁽⁸⁹⁾ 同年一〇月来神したタルカット、ダッドレーや宣教師夫人も教師をつとめたであらう。またグリーン書簡には日本人による日曜学校教師会という記録もあるので、日本人教師も既にいた様子である。

この安息日学校最初の日に参加し、その報告を残した日本人がいる。湊川神社宮司折田年秀である。彼は神戸におけるキリスト教伝道に脅威を感じ、この礼拝に出席し、教部省にその報告を提出しようとした。その稿本は関西学院大学武藤教授のメモとして残されている。

「一、神戸市中宮八番、米国人名グリーン歳三十五、六歳

一、右同 右同人妻メベス 二十八歳

一、神戸八番 米国人デベース 歳四十歳右医者本職ニテ洋教主張

一、右洋婦下婢 名阿松東京ノ産

一、右デベース下婢 名阿夏

神戸中宮八番並神戸八番グリーン、メベス或ハデベース共ニ説講ノ席ハ午前八時ヨリ始リ十二時終ル、聴徒旧十二月七日ヨリ爾後日曜日ニ男女三十八人ヲ以テ満席

内三分二ハ支那人又ハ洋婦人、其一分ハ洋人召使⁽⁶⁶⁾

この日安息日学校を指導したのはグリーン夫妻、ベイリー医師（折田はデビスとベイリーを混同している）で、市川まつとベイリー宅女中夏も手伝った模様である。学校は八時から一二時まで三時間に及び、日本人出席は一〇人程であつたらしい。更に出席者のうち「土地ニテ特に抽ツルモノ」として次の四名があげられている。

「一、三田旧知事

右ハ毎ニ七歳位ノ童女ヲ洋粧ニ仕立、相携講席毎ニ欠ク事無シ、極メテ勉強

一、同人婦人、歳二十六歳極メテ美婦人

右旧知事ト同ク洋粧（洋婦ノ粧ヲ著）説講聴聞又怠ラズ

一、前田泰一 福沢諭吉門生 当時生田村定住右之者教師グリーン並ニデベースニ雇レ洋教書籍売却ノ周旋ヲ致シ居候事

一、兵庫県福原妓店色葉楼娘阿鶴 歳十八歳

右講席毎ニ怠ラス 又洋文字語学伝習但シ下婢扈人随徒⁽⁶⁶⁾

参加者の中で特にこの四名が熱心に出席した様である。旧三田藩知事は九鬼隆義である。彼は天保八年（一八三七）綾部藩主九鬼隆都の三男として生まれ、精隆の養子となった。版籍奉還から明治四年七月まで藩知事であった。⁽⁸⁷⁾一八七〇年からは神戸に住み、志摩三商会総裁（社長白州退蔵、副社長小寺泰次郎）であった。三田藩では、九鬼、白川、小寺の三名が開化策を押しすすめ、洋服着用、牛肉常食、洋書通読、商業推進等の政策を率先して行った。キリスト教信仰も近代化策の一つとして捉えられた。しかしデビスの三田伝道や、長女肇を失くし、デビスによる葬儀以来、九鬼夫妻はキリスト教信仰に強くひかれる様になり、単なる近代化政策以上に、心の問題としてキリスト教を捉えようとしていた様だ。志摩三商会は当時神戸に多くの土地を有し、不動産業や金銀相場を扱う会社であり、多くの旧三田藩士達が雇われており、先の村上俊吉も一時勤めていた。志摩三商会は後年閉鎖されたが、白川、小寺以外の全員がキリスト者になった、と村上俊吉は述べている。⁽⁸⁸⁾

九鬼は晩年になった一八八七年（明治二〇）四月二四日神戸教会で受洗、一八九一年（明治二四）没した。夫人天野園子（一八四九年—一九〇三年、嘉永二年—明治三六年）は二男二女（長女は五歳で病没）があり、妻としての入籍は一八八〇年（明治二三）行われている。⁽⁸⁹⁾夫人の母である小山りきも礼拝に熱心に出席し、神戸公会設立の日に受洗している。

九鬼夫妻は娘共々洋服を着用し安息日学校に通ったのは特に目をひいたらしい。礼拝状況に関する折田の報告は続く、

「旧一二月七日爾後右ノ外皇国人ニテ二席連続スル聴徒無之

但シ室中臭気甚シク且教師男女其国音未熟、故ニ語解兼、聴徒一二席ニテ退散の勢」⁽⁹⁰⁾

折田は先の四人以外連続の出席者がないと述べているが、彼は午前中の安息日学校を一、二回見ただけで、その後

の出席状況を見ていないし、また、午後からの礼拝に出席することをしなかったのは片手落ちと言える。

始めたばかりの日曜礼拝、安息日学校の大半が仮に野次馬気分とは言え、多くの人が集まり、またそこから求道して聖書研究に出席する者も出て来たのは大きな成果であったと言える。

Ⅲ 神戸公会の成立

一 祈 禱 会

既に見て来た様に、学校と学校の聖書研究会から日曜礼拝へと拡がってきた伝道活動の中で絶えず熱心に参加しつづけた人たちが数名いた。彼らは祈禱会を持ち、互の信仰の告白をしてゆく。

一八七三年一月一四日の書簡で、グリーンは五人の青年がその夜グリーン宅に集まり、教会形成に関する会議と祈禱のために集まったと次の様に伝える。

「今夜、以前から知っている五人の青年が教会形成に関する集会と祈りのために私の家に集まりました。祈禱会としては最初の集会で、この青年達のとっている立場に非常に力づけられました。いつ頃教会が組織されるかという事は現時点ではいえませんが、それほど先では無いとの希望を抱いております。……」

教会を急速に形成しようとする途上で大きな困難となることは、友人との交わりの中でほとんどすべての日本人が持っている隠しだての問題と、相手に対するある種の不信感です。はっきりした友情関係を結んだ一、二ヵ月後ですら、お互いを異邦人のように感じさせているのです。週一、二回の祈禱会を定期的に持つことで、この点はほぼ克服できると思っています。」⁹⁹

この祈祷会に出席した五人について、デビスの回顧は六人の青年とそのうちの一人の妻といっている。いづれにせよ名前が推定出来るのは、松山高吉（関貫造）、前田泰一、同妻ちよ（神戸公会姓名録はてふ）、鈴木清であろう。

最初の祈祷会についてグリーンは単に報告するにとどまっているが、同席したデビスの回顧によると日本の中央部において最初に日本人によって献げられた祈りであると感動して伝えている。

デビスによると六人の青年と、その中の一人の妻、グリーン、デビスが会い、ひざまづいて祈った。これは自分が聞いた最初の日本人の口から出た祈りであり、中央日本で最初の祈祷会である。²⁷

個々の信仰がいくら深まっても互いの不信感を取り去った交わりを形成してこそ真の教会が生まれるとの教会観は注目に価する。信仰を神と自己との関係で捉え、お互いの交わりは二義的なものと考える現代の教会や、建物を建てるに教会成立と考える監督教会の考え方に対し、見ゆる聖徒の交わりこそ教会であるとするピューリタンの教会観が貫かれている。

一八七四年一月グリーンは再び祈祷会の近況を次の様に伝える。

「救い主を愛すると少し前に告白した五人の青年に対する確信は日々増しており、教会組織の時は非常に近いと思われます。互いにもっと知り合えるように、また、考え方、共感という点でもっと親密になれるように、更にはお互いの宗教的性格に確信を持つことを学べるように、その時を待っています。それが十分になるまで待てるだけ待つつもりです。彼らのある者達は教会形成を求め、キリストへの信仰を公けに告白することでより力が与えられるということに気づきはじめております。

青年たちがいかに自力伝道 (self propagation) の理念に傾いているかを見て喜んでおります。彼らの目的の一つ

は教会を伝道会 (a missionary society) とすることだ、私もきっとその様に出来るものと確信しております。」⁽⁶²⁾

互いがよく知り合い、深い交わりを形成するために十分な時間をかけ、機熟するのを待てるだけ待とうとする宣教師には、信仰の中心概念が主にある交わりである事、また、この交わりが必ず大きく発展するとの確信があったのであろう。又自給と自力伝道に青年達の意識と関心が集まり、教会即ち伝道会との考えは何とすばらしい考えであつたであらうか。

一八七四年四月二四日付の手紙は、神戸公会設立の事情を今再びこの五人の青年の足跡をふり返って述べたものであるので、要点を紹介しよう。

五人の青年は一八七二年から七三年にかけて宇治野村の学校に通い、使徒行伝とローマ書に親しんだ。彼らは英語の生徒とか日本語教師をして宣教師達に近づいて来た人達である。幾人かは儒教に親しんでいた。少し前から自分達は罪人であり、赦しを必要とする者であると感じ始めていた。しかし、宣教師達が彼らは既にキリスト者であると確信して一連の祈禱会を始めても、自分の感情を他者に打ち明けはしなかった。彼らは伝道を志したものの、教会設立の意義については特に考えなかった。

しかし一八七四年三月頃に大きな変化が現われた。「彼らを分かち続けてきた小さな異和感を取り除かれ、最も麗しい愛の精神と相互信頼が祈りと会話の中に現わされた。そこで公的な集会でいくつかの責任を与えたところ、日本人達が彼らのいうことを受け入れるのを知って大いに驚き、喜びました。女学校から数人と、安息日学校と、礼拝説教でキリスト教を学んだ者達とが加わり、最初一五人が受洗を希望しました。実際には、一人は病氣のため、他の四人は家族との紛争のため取りやめ、一人が受洗することになりました」⁽⁶³⁾

ここでも再び強調されるのは互いに赦し合い信じ合う交わりの形成の困難さであろう。相互信頼のきずなに結ばれ始めて教会が生まれる。宣教師たちは注意深く、その時を待ち、教会設立の記念すべき日を迎えるのである。

二 神戸公会設立の日

一八七四年四月一九日、ついに神戸公会が設立された。この日一人がグリーンから受洗したが、「神戸公会姓名録」による受洗者氏名は次の通りである。

小野俊二、太田源造、太田とら、松山高吉、前田恭一、北村元広、小山りさ、甲賀ふじ、佐治職、市川まつ、鈴木清。

同年四月二四日付書簡で、グリーンはこの日の模様をくわしく伝えていたので、要約すると次の様になる。

この日、礼拝には一五〇名が集まった。式が長時間に及んだので途中から出入する人もあり、全部の聴衆は二〇〇名になる。話の大半は宣教師たちが期待をかける二、三の青年にまかせた。関貫造（松山高吉）は、洗礼について説明を兼ねた奨励をして後、信条を朗読、解説した。教会員の約束も同様であった。前田泰一は聖餐式に先立って奨めをした。関が恍惚となって話が長引いたので、礼拝に二時間半も費やした。その夜グリーン宅の祈祷会に二二、三名が集まり、火曜日の夜の集会には三〇名が集まった。

デビスの回顧によれば、この日の会衆の中には一カ月後に教会を組織する大阪の求道者が数人、はるばる歩いて参加していたし、またC・M・Sのワレン（C. F. Warren）も臨席し、祝福を献げた。デビスは片言の日本語で教会に対する勧めをしたが、その内容は「愛と言う言葉が、この日から新しい意味を持った」と言うことであった。

二時間半に及ぶ洗礼、聖餐式と教会設立式を実施した初代の信徒たちと宣教師にとって、この日は感銘深い日であっただろう。松山高吉が恍惚となつて長時間話したのも感激の余りであろう。尚、この会堂には最初椅子はなく、皆が畳に坐っており、その真ん中で松山は仏僧の様に坐つて話していた、⁽¹⁷⁾という。

この教会の設立の日まで、グリーンが指導的役割を果して来たのは、今迄見て来た通りである。ところが教会設立直後の同年六月一日にグリーンは松山高吉を助手として連れて、聖書翻訳事業のために横浜に向けて出帆する。その為教会運営は、長老前田泰一の肩にかかる。同年五月九日付グリーン書簡はそうした事情を次の様に伝える。

「教会に牧師がいませんので、主たる責任は不動産業と貸付業をしている二六歳の青年の上にあります。長老派の兄弟の理解に従つて、彼は長老と呼ばれ、会衆派教会の役員会の委員長の役割を演じています」⁽¹⁸⁾。

前田に関する説明は更に続く。彼は実業家で月四〇ドルの収入がある。彼は牧師となる可能性があるのですが、長老に選ばれた。彼は日本語と中国語の教育があり、英語の知識も十分に持つており、注解書も読むことが出来る。彼は勤勉家で、受洗前でも説教をしていた。彼自身の希望は牧師になることだが、そうすると月二〇ドルの給与と言う、重い負担を教会にかける。そこで彼は自分が仕事に励み、その収入で教会員二名を説教と勉強に献身できるようにしよう、と申し出ている。これは新約聖書の共有の精神をあらわすものとして評価できるが、良い説教家をあきらめるのは困難である。⁽¹⁹⁾

結局誰も牧師としての就任は見なかった。このことは、牧師教育という訓練の問題と、牧師を支えるという、自給の問題の二つがある。当時、英語の聖書注解書しかないと言うこともあつて、英語教育を施すことが牧師となる第一条件である、と宣教師は考えた様である。当時すでに塾を開いていたタルカットは、教育と伝道との関係を次の様に

言う。

「せめてわたし共に主のみ名において入りこんでゆき確保するのに充分な素養を身につけた人々の組織集団がありましたら、この国のクリスチャンたちは、この活動における自分たちの責任を感じており、種を蒔くことを切望しておりますが、またこの活動のための修練の必要を痛感し、それだけ一層、自分たちが外国語だけで聖書を読めるようになることを願っております」(鈴木・若山訳)

この書簡からするとタルカットの塾における英語教育は伝道者養成と言う目的が一つあった様である。そして一八七五年開校された同志社英学校は、宣教師側からみれば、こうした願いを実現した学校であった。

今一つの問題は、自給して牧師の給与を出すことである。グリーンは、この教会に会計がいること、日本人が三田伝道に赴く時の費用は彼らが負担していることを報告している。そして、日本人キリスト者の牧師給与に関する議論を紹介する。前田泰一は月二〇ドル以下で暮せるだろうといったが、多くの人たちは、牧師は客を持成す為に大きな家が必要で、又、伝道旅行の費用も必要だから、月二一ドル前後が適当だと言う。宣教師たちはこの額の高さに驚くが、一方官庁務めの教会員が三〇ドルから五〇ドルの給与であるから、二二ドルは必要な額であろう、と述べている。^(註)

一八七八年(明治二一)浪花教会が始めて自給教会として設立されたが、牧師沢山保羅への給与は一五円、しかも初年度は七円余りしか払われなかった。その事は、牧師としての強い召命感と教会全体の自給への強い意気込みがなければ、自給教会は形成されないと言うことを意味する。この点宣教師の神戸公会の自給に対する指導は、甘いと言わざるを得ない。浪花教会が十分の一献金で自給を達成したのに対して、神戸公会では会堂の後に箱をおいて、各自が

任意に献金を献げたと言うのでは、おのずと大きな違いがあった。

三 公 会 規 則

最後に、神戸公会創設期の信条、規則についてふれてみたい。創設期の神戸教会や梅本町公会（一八七四年五月設立。大阪教会）がどのような信条、規則を持っていたのかは伝わっていない。一八八六年（明治一九）に成立し、これらの教会が属した日本組合基督教会では、各個の教会がそれぞれ信条、規則を持ち、更にそれが時代によって追加、変更を受けているので、創設期の原型を推定するのは困難になってしまっている。

一方、グリーン書簡による教会設立の日の模様を見ても、関貫造が信条を朗読し、解説したと述べられており、信条が教会設立の日に存在しているのが確認される。

今、私たちの知りうる範囲の信条、規則に関する資料は次の三つである。一、宣教師レポートの中の神戸公会規則（英文）。二、英文『デビス伝』（J. M. Davis, *Davis-Soldier, Missionary*）にデビスが作成したとして紹介されている信条。以上二つを訳して土肥昭夫教授は『日本プロテスタント教会の成立と展開』の中で、初期の信条、規則を紹介しておられる。三、神戸女学院大学ミッション・ライブラリー所蔵『公会の主意』。これは関西に教会が数カ所成立した際、どの教会にも適用するものとして印刷されたものである。印刷年代を欠くが、長老に代えて会長が置かれている事と、教会を「公会」と称している事から、一八七五年（明治八）以降一八七九年（明治一二）以前の文書と推定される。これには「公会の主意」「信仰の簡条」「バプテスマをうけて公会の兄弟の約束」「公会の規則」が入っている。信条にあたる「信仰の簡条」は万国福音同盟会の九カ条によっており、訳文は異なるが横浜の「日本基督公会」の

ものと同じである。当論文では「公会の兄弟の約束」と「公会規則」を土肥論文(Dとする)と『公会の主意』(Aとする)を用いて再現してみよう。『公会の主意』の句読点つけ及び改行は筆者。)

「公会の兄弟の約束」

「われわれこの公会に入る人を歓迎でうけ、つねにしたしみいつくしみ、この人の道をまもるやうに聖霊のみちびきを祈り、公会の人に交るに互の私の心をして、ただわれわれのために死したまひし耶蘇救主のためにたらしき、なにごとかみのみところも聖意にしたがひ、また国の法律をもおかさず、すべて国を愛する心をもちて、人々に救主のことを伝へ、ともに道にすすみて、道のさまたげとなる業をはいたさず、道のさまたげとなることを知らば少したりともいたさず、また神を拝し神のおしへを学ばんために安息日をいさぎよく守るべし。」(A)「そして神がわれわれすべてのものを死にいたるまで忠信ならしめ、信仰者の数を大いに増し加えられんことを祈るがゆえに」(D)「ともに手を握りわれわれの交りと愛するところをあらはすべし。」(A)

「公会の規則」

「安息日ごとには公会の人々みなその職業をやすみ、無掟き事よりほかに仕事他行をいたさずして会堂にあつまり、神の恩徳をほめあがめ、神に祈りまた神の道をききて大切にこれをまもり、心の中をいさぎよくいたすべし。毎月はじめの安息日には公会の人々は皆晩餐の礼をまもるべし、またバプテスマを受け公会に入りたきものあれば、この日に礼をおこなうべし。」

すべて道を信ずる人はともに晩餐の礼をまもることをうるべし。

又道を信ずる人その子にバプテスマをうけさせ、いさぎよきものとなさんとおもふものあればその心に任すべし。

いづくの処にうつり又はたびするとも三週間より以上も家にあらぬときはそのことを公会にしらせ、其後もたがい便をいたすべし。またなにかゆえありて外の公会にいらんとすることあらば、公会相談のうえにて長老(注。『公会の主意』では会長。以下同じ。)の手紙をうけてゆくべし。

公会の中に牧師長老執事の三の役あり。其中牧師は常に神に祈り、道をおしへ、其他公会の諸用事に心を配るべし。またバプテスマと晩餐の礼を行うときは其役をいたすべし。公会に相談あるときは相談の頭となるべし。また常に人をみちびき道をすすめ、病あるひは憂ある人をなぐさめ世話すべし。公会より牧師の役を断り、または自分より其役を辞るときも、そのことをすべての公会に相談していたすべし。

長老は牧師の手伝をなし、すべて公会に入らんとするものあらば、先其人に逢ひ其後公会の人々の相談によりて其人を入べし。其他公会の諸事を前もって心掛けて、公会の人々の不都合なきよういたすべし。』(A)

「毎月はじめの安息日の前の金曜日には公会の人々皆あつまり、神に祈り、諸事を相談いたすべし。公会の人々なにごとによらず相談いたしたきことあれば憚らずして相談いたすべし。』(A)「入会志願者の承認はこのときになされる。』(D)

「十月(注。『公会の主意』では二月)初の安息日の前の金曜日には、公会の人々皆あつまり神に祈り、長老と執事を入札して撰み、又此後公会の規則などあらためんとおもへば、相談いたすべし。すべて公会の相談は人数三ツ割の二同意なればこれを定め、あとの一は随ふべし。

公会の人々毎月多少によらず、其人相応の金を執事にいだして」(A)「福音伝播のためまた」(D)「公会の諸入用などにいたすべし。』(A)

まず職制は横浜の日本基督公会にならって、牧師―長老―執事となっている。グリーンは「長老」と言うのは「役員会の委員長」という意味であると説明している。これにより神戸公会では前田泰一が長老であった。しかし日本基督公会との合同が失敗した後長老職が廃止され、一旦会長と言う呼称になったのち執事（複数）となり現在に至っている。尚、この規則という執事は会計のことである。

さて、この規則で目立つ事は聖日礼拝厳守主義が顕著である。この規則では罰則は述べられていないが、「安息日ごとには公会の人々みなその職業をやすみ仕事、他行させず」礼拝を守ることを義務づけている。また三週間以上家をあげ、公会に出られぬ場合は必ず公会に通信を送るように定められている。こうした聖日礼拝厳守主義が初期の日本の教会を支えた力であったと言っても過言ではないだろう。

また愛国の情を訴え「国の法律をおかさず、すべて国を愛する心をもち……」と述べているのは注目される。

それではイエス・キリストの福音と、聖日礼拝厳守主義中心のこうした規則だけで良かったのかといえば、そうではなく、酒、たばこ、放蕩を戒める倫理的規制も強かった。市川栄之助の糺弾口書によると、取調官がキリスト教の教は何かと問うと、栄之助が次の様に答えている。

「耶蘇の教と申は是迄念し候神仏を廢し、一心に耶蘇を信仰致、淫事、^{たばこ}酒、^{たばこ}葷等^{たばこ}を禁し、正直を旨とし虚言を謹し候等の戒を守り候様教授致し候……（略）……」⁽⁸²⁾（句読点は筆者。）

即ちキリスト教の教とは、今迄信じて来た神仏を棄てて、イエス・キリストを信仰することであり、同時にすべての淫行、酒、たばこをたしなまず、正直を旨として、嘘を言わない等の戒を守ることである、と言うのである。こうした十戒の嚴守、酒、たばこの禁止、正直を旨とし、嘘をつかないという行為は、信仰の証しとして長い間日本のプ

ロテスタント教会の人々に要請された倫理であった。それらが神戸公会成立以前から言われていたことは注目に価する。南北戦争後のアメリカ教会の矯風運動が宣教師によって、日本に持ち込まれたと言えよう。

結びにかえて

本稿では宣教師D・C・グリーンの神戸における足跡を追ひ、福音宣教の種がどの様に蒔かれ、芽を出し、生長して、結実したかを見て来た。

グリーンの家に出入りする数名の者はやがて家庭礼拝を通して福音にふれていった。ここで養われた信仰を持って、渡米してすぐに受洗した(一八七二年)沢山馬之進も忘れてはいけなだろう。次にグリーンらは人々を知る機会を増すために学校を開き、そこの日曜日の聖書研究は数名の求道者を生むに至った。切支丹禁制令が解けて可能となった日曜礼拝、安息日学校を通し、更に信仰を深められた人々もいた。こうした求道者を集めた祈禱会こそ、神戸公会の基礎を形づくった。教会は交わりであり、お互いの信頼関係なしに教会は生れない事を教え、導いた宣教師たちの信念は、愛と忍耐で満ちていた。教会設立の日の「今日愛が新しい意味を持った」(デビス)との言葉こそ、神戸公会の、そして日本の教会の原点であり、到達すべき目標であらう。

注

- (1) *Mission News*, Vol. XIII, No. 5, (Feb. 15th, 1910) (以下本稿やMN, 以下) p.89.
- (2) D. C. Greene's Letter to A. B. C. F. M. (以下GL, 以下) No.9, March 17, 1870.
- (3) GL, No. 14, Nov. 12, 1870, 及び No.15, Jan. 18, 1871.

- (4) *A Chapter of Mission History in Modern Japan*, compiled by James H. Pettie, p. 7.
- (5) GL, No. 14, 及び MN, *idem*.
- (6) 「神戸在留米国人雇永之助紀彈口書」『大日本外交文書』四卷八四七頁以下。
- (7) MN, p. 92
- (8) MN, p. 89.
- (9) 小崎弘毅『日本組合基督教全史』（未定稿）二二頁。
- (10) GL, No. 9, March 17, 1870.
- (11) GL, No. 11, June 14, 1870.
- (12) (9) 参照。
- (13) GL, *idem*.
- (14) 堀博「小出石史訳『神戸外国人居留地』（*The Japan Chronicle*, Jubilee Number. の訳）八八頁以下。
- (15) GL, No. 15, Jan. 18, 1871.
- (16) GL, No. 16, March 17, 1871.
- (17) I. R. Worcester's Letter to D. C. Greene, May 3, 1871.
- (18) *Kobe Union Church* 1871—1971.
- (19) *ibid*.
- (20) GL, No. 16, March 16, 1871.
- (21) 「神戸在留米国人雇永之助召捕に關スル件」『大日本外交文書』四卷八四一頁以下。
- (22) O. H. Guick's Letter, July 1, 1871, *Missionary Herald*, October, 1871.
- (23) O. H. Guick's Letter, July 8, 1871, *Missionary Herald*, *idem*.
- (24) O. H. Guick's Letter, July 17, 1871, *Missionary Herald*, *idem*.
- (25) O. H. Guick's Letter, July 31, 1871, *Missionary Herald*, November, 1871.
- (26) O. H. Guick's Letter, Dec. 16, 1871, *Missionary Herald*, April 1871.
- (27) 「壬申七月大坂神戸横浜邪宗」事情」杉井六郎「小沢三郎編日本ノロタニヤ史史料（一）」『キリスト教社会問題研究』二〇号所収。

- (28) GL, No. 29, Dec. 16, 1872.
- (29) GL, No. 30, Feb. 17, 1873.
- (30) GL, No. 11, June 14, 1870.
- (31) GL, No. 31, Feb. 17, 1873.
- (32) 『福音新報』二卷一十号(明治一七年四月二三日)。
- (33) GL, No. 29, Dec. 16, 1872.
- (34) *M/V*, p. 95.
- (35) GL, No. 27, Nov. 1, 1872.
- (36) GL, No. 29, Dec. 16, 1872.
- (37) *ibid.*
- (38) 松山高吉「旅日記」溝口靖夫『松山高吉』所収。
- (39) 伊沢道一「日記」(明治五年十二月十三日到米) 小沢三郎『日本プロテスタント史研究』二七三頁。
- (40) 同右資料、同右書。
- (41) 伊沢道一「報告書」(発西一月十日付) 同右書、二七四頁以下。
- (42) GL, No. 30, Feb. 17, 1873.
- (43) (41) 同29。
- (44) GL, No. 31, March 5, 1873.
- (45) GL, No. 38, Oct. 3, 1873.
- (46) GL, No. 41, Jan. 13, 1874.
- (47) GL, No. 29, Dec. 16, 1872.
- (48) GL, No. 30, Feb. 17, 1873.
- (49) Minutes of the Annual Meeting, Kobe, Feb. 3rd, 1873.
- (50) GL, No. 31, March 5, 1873.

- (15) 『植村正久と其の時』一巻二二三頁以下。
- (16) 母沢直一「報中書」(明治六年四月十五日渡来)小沢三郎、前掲書、二七五頁以下。
- (17) GL, No. 32, May 23, 1873.
- (18) GL, No. 35, June 2, 1873.
- (19) Minutes of Special Meeting. Kobe, Nov. 3rd, 1873.
- (20) Minutes of Annual Meeting. Kobe, May 27th, 1874.
- (21) MN, p. 90f.
- (22) MN, p. 97.
- (23) (23) 同前。
- (24) GL, No. 38, Oct. 3, 1873.
- (25) GL, No. 39, Oct. 17, 1873.
- (26) GL, No. 40, Nov. 14, 1873.
- (27) 坂上俊吉『回顧』六六頁以下。
- (28) MN, p. 97.
- (29) 坂上俊吉「神戸地方に於ける基督教宣教師の一史料」『関西学院短期大学論叢』一号所収。
- (30) 同右資料。
- (31) 『三田市史』上巻四三三頁以下。
- (32) 坂上俊吉、前掲書、六五頁以下。
- (33) (33) 同前。
- (34) (34) 同前。
- (35) GL, No. 40, Nov. 14, 1873.
- (36) MN, p. 96.
- (37) GL, No. 41, Jan. 13, 1874.
- (38) GL, No. 46, Apr. 24, 1874.
- (39) ibid.

- (76) *MN*, p. 97f.
- (77) *MN*, p. 90.
- (78) *GL*, No. 47, May 5, 1874.
- (79) *ibid.*
- (80) 鈴木恒弥・若山晴士訳「タルカット書簡―訳及び注(一)」『論集』(神戸女学院大学)二四卷三号所収。
- (81) *GL*, *idem.*
- (82) (9) ㄱㄲㄴ。